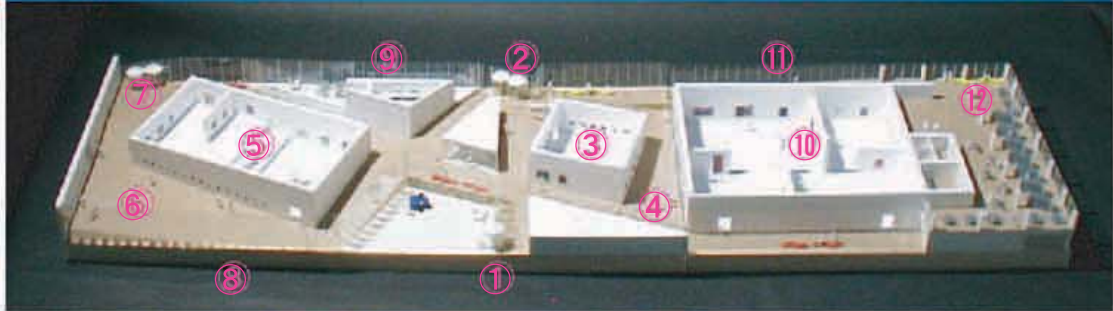


YOKOSUKA ART MUSEUM

Design based on the sequence of space



空間のシークエンスに基づく設計 —横須賀市美術館計画への一試案—

計画趣旨

人間がいかに建築を認識あるいは評価し、感性的な潤いのある空間として捉えるかは、設計上の重要な課題である。人文地理学者であるイーファー・トゥアンは著書の中で時間と場所の関係について、「時間を運動もしくは流れとして捉え、場所を時間の流れの中での休止として捉える考え方」があるとしている。つまり、建築空間の価値基準を与える場所性は、空間を継的に映画の「コマ」のように扱い、シークエンスとして建築的に操作創造することで生み出されると解釈できるのである。

そこで本計画は上述の理念を基に、「(仮称)横須賀市美術館計画」において空間のシークエンスに基づいて設計することの有効性をみいだす試みであると同時に、今後の地域施設のひとつのあり方を模索することを目的とする。

美術館の発展の段階と将来像

第1世代の美術館

18世紀末までに成立した王侯貴族のための私的コレクションの公開

第2世代の美術館

アカデミーの権威にたいする意図的な反抗として生まれた美術運動とかかわっている

第3世代の美術館

近代美術館の批判の上に成り立ち、1960年代の現代美術の動向「サイトスペシフィック」との関連

近代美術 普遍性 均一性
場所性 インスタレーション サイトスペシフィック

ホワイトキューブ

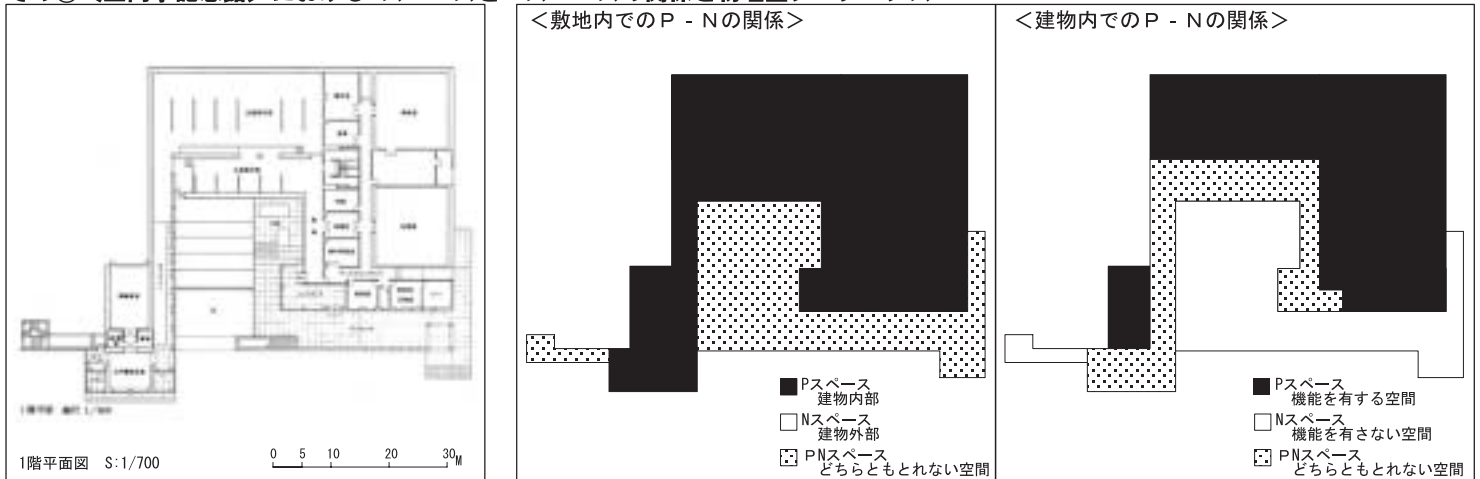
特徴のある造形空間

→ 21世紀の美術館へ ←

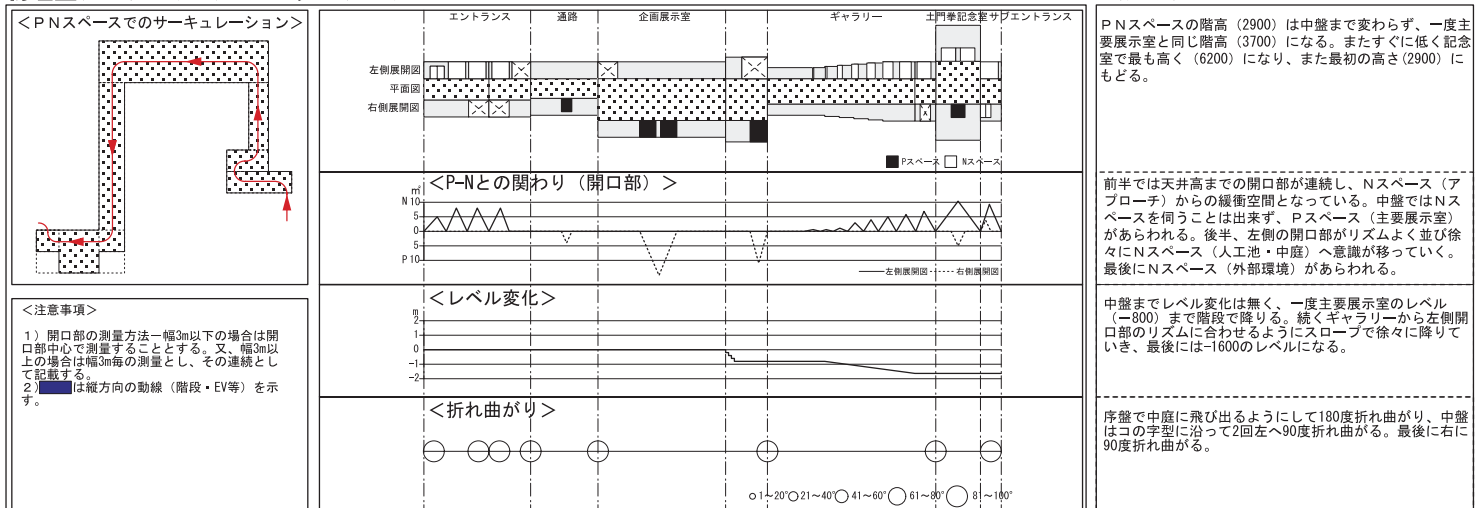
事例研究—PNスペースとシークエンス

既存する美術館建築がどのようなシークエンスを演出しているのかを明らかにするために、事例研究では芦原義信の「空間の積極性と消極性」に着目した空間概念を美術館建築に当てはめ考察している。この概念を用いた理由としては本計画の場合、単に空間の連結方法を分析するよりもむしろ空間全体の継的な分析が必要とされるため、基本的に、展示部門や収蔵部門、事務部門といった機能の明確な求心性の強い空間をポジティブ・スペース (P-スペース)、外部空間など境界がはっきりせず外側に向かう遠心性の強い空間をネガティブ・スペース (N-スペース) とし、その中で、どちらともつかない中間的な空間をPNスペースと定義することで、それらの空間が持つ質の違いに焦点をあてている。そして、PNスペースと定義した空間の建築的要素を抽出し、その物理量の変化を計測し記述することでシークエンスの考察を試みている。

その①<土門拳記念館>におけるPスペースとNスペースの関係と物理量シークエンス



物理量シークエンス・ノーテーション



敷地調査

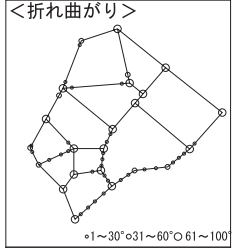
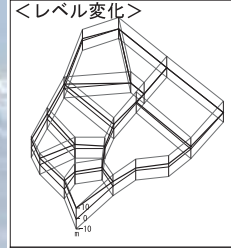
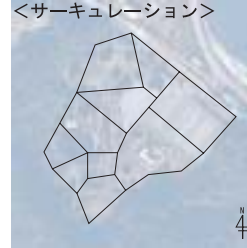
計画地の前に東西にはしる県道観音崎環状線において、両アプローチから敷地までのシークエンスを記録し、どのような要素によって構成されているかをローレンス・ハルブリンのモーテーション（ムーブメント・ノーテーション）のシステムを用い調査した。さらに敷地の物理量シークエンスを加味した考察により、「手前配置」によって美術館の視認性を高め、既存の公園を保存し美術公園として新たな機能を持たせるといった方向性が示された。

<走水園地の敷地特性><物理量シークエンス>

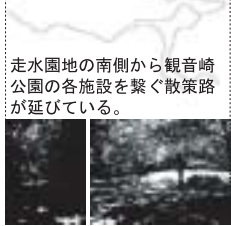
<東側ルートのモーテーション>



周囲3面を観音崎公園の緑に囲まれている。



走水園地の南側から観音崎公園の各施設を繋ぐ散策路が延びている。



観音崎の生態的な自然(左)と園地の人工的な自然(右)による木漏れ日



敷地北側：海面による水平線



敷地南側：観音崎の山々による曲線

<シークエンス・ノーテーション>



<ノーテーションで記録された場面の構成要素>

県道から園地に入っていくと木漏れ日の落ちる見通しの効かない散策路が奥に向かって続く。所々にブリッジや人工池が現れる。奥に進むに連れて木陰が多くなり、観音崎公園の生態系の自然へと繋がっている。振り返り海側を見ると樹木の間から海面を見ることが出来る。

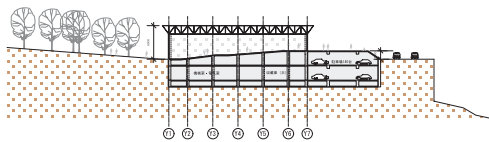
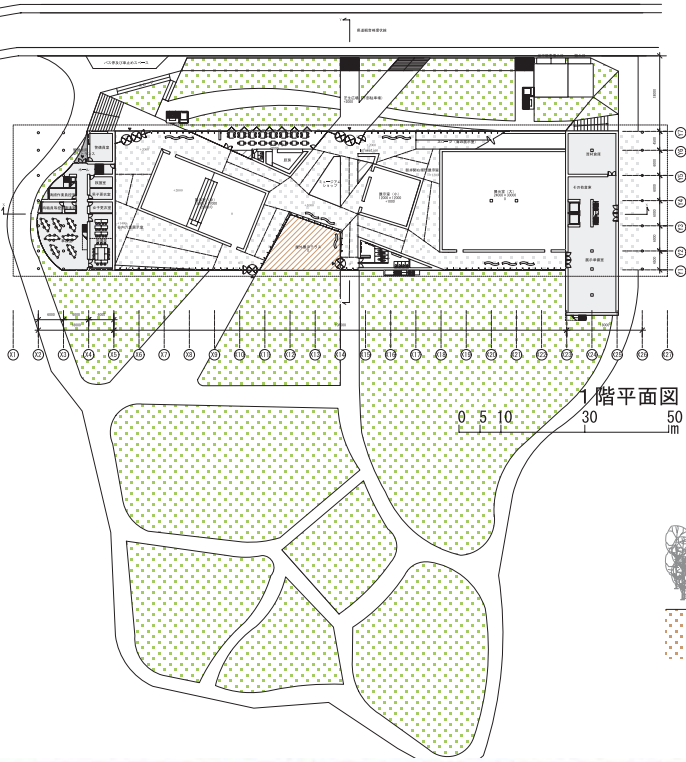


③ブリッジ ⑥園地から北側に向かって

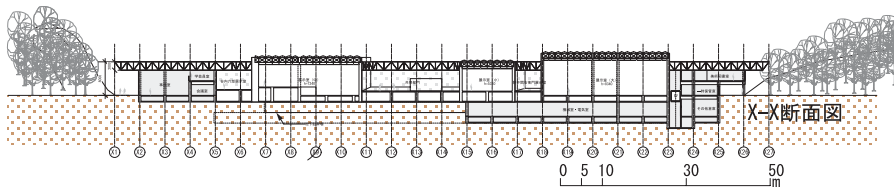
「手前配置」を前提とした3案についてPNスペースにおけるシークエンスの分析と同時に、展示室の相互関係や動線処理の比較検討を行った。

ダイアグラムの検討

	A案ダイアグラム	B案ダイアグラム	C案ダイアグラム
配置とP-Nの関係	<p><P-Nとの関わり> P-N</p> <p>評価 1. 全体としてのPNスペース 2. Pスペースの会館からNスペースを感じる事ができる。 3. 海と山の二面性が楽しめる。</p>	<p><P-Nとの関わり> P-N</p> <p>評価 1. 導入部分としてのPNスペース。 2. Nスペースが常に一定に感じられる。 3. 山側が塞がってしまう。</p>	<p><P-Nとの関わり> P-N</p> <p>評価 1. 導入部分としてのPNスペース。 2. 地下ではNスペースが全く感じられない。 3. 山側が塞がってしまう。</p>
平面・断面	<p>1階平面 地階平面</p> <p>評価 1. 全体としてのPNスペース 2. Pスペースの会館からNスペースを感じる事ができる。 3. 海と山の二面性が楽しめる。</p>	<p>1階平面 地階平面</p> <p>評価 1. 全体としてのPNスペース 2. Pスペースの会館からNスペースを感じる事ができる。 3. 海と山の二面性が楽しめる。</p>	<p>1階平面 地階平面</p> <p>評価 1. 全体としてのPNスペース 2. Pスペースの会館からNスペースを感じる事ができる。 3. 海と山の二面性が楽しめる。</p>
解説	<p>1. 展示室の相互関係 分散</p> <p>2. 導入方法 南北2方向</p> <p>3. 来館者動線 回遊</p> <p>4. 管理者動線 (断面)</p> <p>評価 1. 矩形的展示室と隙間の展示室の空間がある。 2. 南北2方向からアクセス可能で、正面をつくらない。 3. 来館者動線にアクティビティは生まれるが順路を設けにくい。 4. 管理者動線は収蔵部門と事務部門が離れてしまう。</p>	<p>1. 展示室の相互関係 並列</p> <p>2. 導入方法 1方向</p> <p>3. 来館者動線 並列</p> <p>4. 管理者動線 (断面)</p> <p>評価 1. 全ての展示室を等価に扱える。展示室の性格はでにくい。 2. 北側からアクセスし建物の南側に背面ができる。 3. 来館者動線の混乱が少なく、様々な展示に対応しやすい。 4. 管理者動線は事務部門を経由し収蔵展示部門にアクセス可。</p>	<p>1. 展示室の相互関係 階別</p> <p>2. 導入方法 東西2方向</p> <p>3. 来館者動線 テーマ別</p> <p>4. 管理者動線 (断面)</p> <p>評価 1. テーマを階別に分けるのでわかりやすい。 2. 東西の軸を強調するようにアクセス。 3. 来館者動線の混乱が少なく、わかりやすい。 4. 管理者動線は各部門にそれぞれアクセス可能。</p>



Y-Y断面図



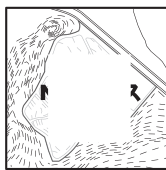
X-X断面図



◆美術館と園地の新たな関係

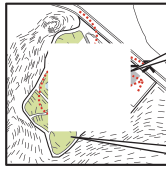
◆建築を構成する3つの要素

◆採光方式



現在
走水園地→Nスペース

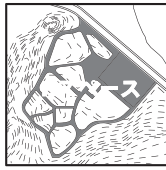
第6章 敷地調査の考察



美術館は園地の手前に配置する。
美術館→P'スペース
(導入部としての役割)

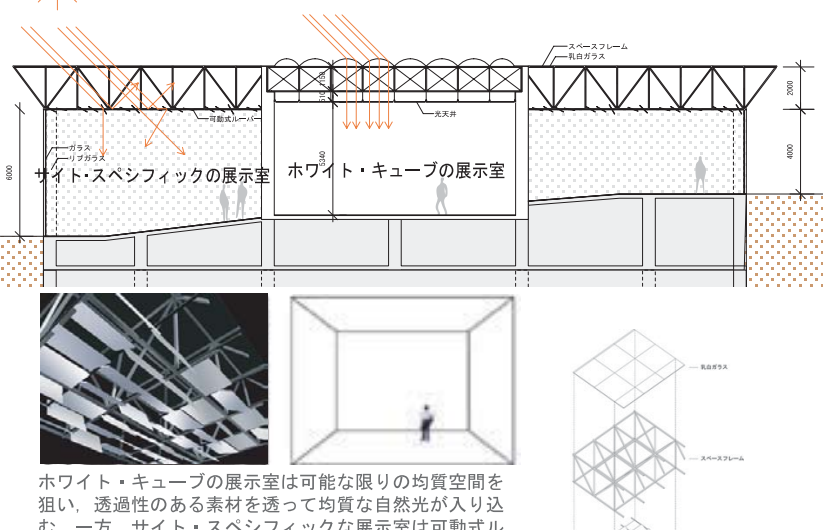
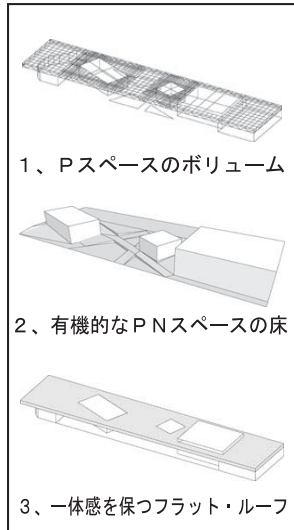
園地は現状のまま保存する。

横須賀市美術館



走水園地全体→Pスペース
(美術公園)

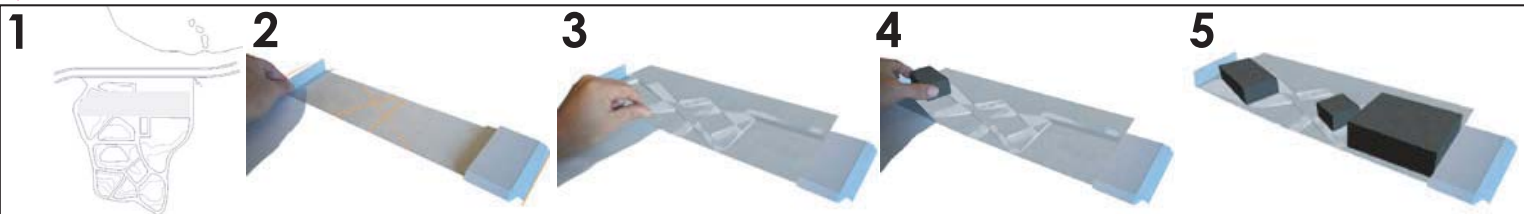
既存の園地に所々に屋外展示物を
配置し美術公園として利用できる
ようにする。



ホワイト・キューブの展示室は可能な限りの均質空間を狙い、透過性のある素材を透して均質な自然光が入り込む。一方、サイト・スペシフィックな展示室は可動式ルーバーにより、園地の木漏れ日のように不規則な自然光が落ちる空間を選択肢の一つとして取れるようになっている。これによりシーケンスが全く排除された均質空間と、園地のシーケンスを取りこんだ空間の二極化がさらに図られることを意図している。

フラットルーフ・コンポーネント

◆DESIGN PROCESS



1 園地の手前に東西にPNスペースを帯状に設定する。

2 両サイドに事務・研究部門および収蔵部門を起こす。PNスペースに走水園地の既存の散策路から建物越しにでも向こうの景色が伺えるように、散策路の延長線を引く。

3 展示室の隙間の床を北側を+2000、南側を0のレベルに合わせ、傾斜をつけながら園地の地盤と連続するように起こしていく。

4 決定したキューブの位置に大中小の展示室の高さがそれぞれ10・8・6メートルになるようにPスペースを挿入していく。

5 不規則な地盤とPスペース(近現代美術の展示室)の関係によって生まれる有機的な空間に郷土ゆかりの展示室、レストラン、テラス等の機能を与え、場所にしていく。